

# 冬の沿道景観活用による地域協働事例 —「シーニックdeナイト」のこれまでの歩みと20周年に向けた今後の展望—

函館開発建設部 道路計画課<sup>1</sup> ○増井 隆馬<sup>1</sup>  
NPO 法人スプリングボードユニティ 21 理事長<sup>2</sup> 折谷 久美子<sup>2</sup>  
一般社団法人北海道開発技術センター 調査研究部主席研究員<sup>3</sup> 中村 幸治<sup>3</sup>

冬の沿道景観活用による地域協働事例として、「シーニックdeナイト」（函館・大沼・噴火湾ルート）が2006年にシーニックバイウェイ指定ルートに認定されたことを記念し、冬を楽しむ取り組みとして、手作りワックスキャンドルを活用したルート間連携事業の一つ）について、取り組みの背景や、実施状況、地域への普及・浸透状況等について報告するとともに、冬季沿道景観を活用した地域協働プロジェクトにおける今後の可能性、ルート間連携における課題とその展開方向等について考察した。

キーワード：シーニックバイウェイ北海道、冬季の沿道景観、手作りワックスキャンドル、広域によるルート間連携、地域活性化

## 1. はじめに

シーニックバイウェイ北海道は、地域に暮らす人が主体となり、企業や行政と手をつなぎ、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを目指す取り組みであり、2005(平成17)年よりスタート、2022(令和4)年12月現在、14の指定ルート、3つの候補ルートがあり、約500団体が様々な活動を展開している。(図-1)

私たちが暮らす「函館・大沼・噴火湾ルート」は、函館市・北斗市・七飯町・鹿部町・森町・八雲町から形成され、多彩な景観地域資源を有する地域にあり(図-2)、美しい景観の保全や地域住民と来訪者の交流を深める企画として、沿道等を舞台とした「シーニック清掃活動」、「シーニックdeナイト」等の様々なルート連携活動を展開している。



図-1 シーニックバイウェイ北海道ルート



図-2 道南地域の位置図

本論文では、冬の沿道景観活用による地域協働事例として、函館・大沼・噴火湾ルートの連携事業の一つである「シーニックdeナイト」について、取り組みの背景や、実施状況、地域への普及・浸透状況等について報告するとともに、冬季沿道景観を活用した地域協働プロジェクトにおける今後の可能性、ルート間連携における課題とその展開方向等について考察した。

## 2. 取り組みの概要

函館・大沼・噴火湾ルートでは、2001(平成13)年から

函館市の玄関口である「国道5号函館新道」にて「はこだて花かいどう」と呼ばれる花植活動の取り組みを始めた。その活動をしている中で、「道南地域に冬のイベントがない。」「夏同様、冬にも顔を合わせる機会がほしい。」という声が上がったことをきっかけに、シーニックバイウェイ指定ルートに認定された2006年(平成18)に「シーニックdeナイト」を始めた。

取り組みの狙いとしては、シーニックバイウェイ北海道のキーワードである『連携(地域住民と活動団体と観光客など)』による「地域の活性化」や「広域にわたる連携・協力体制の構築」、そして「周遊観光の促進」などがあげられる。(表-1)

表-1 取り組みの概要

シーニック de ナイト	
対象ルート	函館・大沼・噴火湾ルート
実施期間	毎年2月上旬～下旬の週末に各地で開催
主催	シーニック de ナイト実行委員会
特徴	各開催会場で、同じキャンドル(手作りワックスキャンドル)を使用すること
背景と狙い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルート指定記念事業として、新たな連携活動の試行的実践</li> <li>・活動団体同士の連携(参加と協力)</li> </ul>
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ルート連携による取り組みの展開</li> <li>○シーニックバイウェイ北海道の普及</li> <li>○活動団体同士の参加と協力体制の構築</li> <li>○地域住民の参加による地域の活性化</li> <li>○観光客の参加による周遊観光の促進</li> </ul> ※多くの方々の参加によりキャンドルを作ることを楽しみ、灯りをつけることを楽しむこと

### 3. キャンドル製作及び各地の開催状況

函館・大沼・噴火湾ルート内の各地域で行われた取り組みについて、以下に実施状況を報告する。2019(令和1)年12月からのコロナの影響でイベント中止を考えたが、コロナ禍だからこそ手作りキャンドルを通して、道南を訪れた方や地域の方々に少しでも明るい気持ちになってもらいたいという思いで、感染対策を徹底の上、実施した。

#### (1) ワックスキャンドル製作体験会

毎年2月上旬～下旬の週末に各地で開催される「シーニックdeナイト」の事前準備として、12月～1月下旬にかけて、その年に使用するワックスキャンドル製作体験

会を実施している。ワックスキャンドルに使用するローソクは、植物性100%のものを使用している。また、使用後は溶かして次年度に再利用することでSDGsの目標12、「つくる責任つかう責任」を意識し、環境に配慮しながら活動を行っている。

直近では、函館市と七飯町の7箇所で開催した。

製作体験会では、各会場に設置するワックスキャンドルを実行委員会の構成団体メンバーや地元住民、観光客らが製作に携わる。具体的には、牛乳パックに溶かしたろうを流し込み、回転させながら冷やして固め、中が空洞になった角柱型キャンドルに仕上げていくという工程である。(写真-1, 2, 3, 4)

#### (2) 函館新道会場

国道5号函館新道において、道ゆくドライバーや函館を訪れた国内外の観光客の方々に「綺麗な冬の沿道景観」を見て、喜んでもらいたいというおもてなしの取り組み。初年度から活動継続されている会場である。(写真-5, 6)

函館新道では、夏から秋にかけて植栽活動が行われており、これと同じ場所に設置された手作りのアイスキャンドルには、その花が使用されている。(写真-7, 8)



写真-1 製作体験会の様子



写真-2 ろうを流し入れる



写真-3 キャンドルの冷却



写真-4 キャンドルの加工



写真-5 国道沿道の演出



写真-6 ハート型の設置



写真-7 押し花キャンドル



写真-8 小学生も多数参加

### (3) 五稜郭公園会場

一年を通じて、国内外の観光客が多く訪れる五稜郭公園会場では、堀の外周が約1.8kmの散策路となっており、美しい星型がイルミネーションとともに浮かび上がる。公園の周遊路を散策しながら楽しむほか、五稜郭タワー展望台から見おろす景色は誰もが歓声をあげる。

(写真-9, 10, 11, 12)



写真-9 外周の散策路



写真-10 星形の稜線

### (4) 函館市 縄文文化交流センター会場

2021(令和3)年7月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産への登録が決定した函館市縄文文化交流センター会場では、同センターの駐車場や沿道に飾られた約400個のワックスキャンドルの明かりが雪上を優しく照らし、来場者とドライバーの目を楽しませた。(写真-13, 14, 15, 16)



写真-11 参加者の様子



写真-12 五稜星の夢

### (5) その他の会場

#### a) 亀田八幡宮境内 (函館市)

約230本のワックスキャンドルのほか、数多くの雪だるま等も製作し、来訪者とともに手持ち花火も楽しんだ。(写真-17)



写真-13 道の駅の活用



写真-14 世界遺産のPR

#### b) シエスタハコダテ前 (函館市)

五稜郭タワーまでの行啓通をワックスキャンドルが連なった。また、関連イベントとして、ファーマーズマルシェも開催され温かい野菜スープを販売した。(写真-18)



写真-15 土偶を模したランタン



写真-16 土器型のキャンドル

#### c) 地域交流まちづくりセンター (函館市)

函館でも歴史ある西部地区の沿道には、手作りの暖かなキャンドルの灯りが並び、地元の人々だけでなく、訪れた観光客も楽しんでいった。(写真-19)



写真-17 亀田八幡宮境内



写真-18 シエスタハコダテ

#### d) 七飯スノーパーク会場 (七飯町)

「雪育プロジェクト」との連携により、たいまつ滑降と合わせて実施した。たいまつ滑降参加者20名は、チームワーク良くゲレンデを幻想的に滑ることができ、スタッフと初開催のお客様が一体となる素敵なイベントとなった。(写真-20)



写真-19 まちづくりセンター



写真-20 七飯スノーパーク

また、コロナ禍以前は下記の会場においても活動を行っていた。

#### e) オニウシ公園 (森町)

道の駅「YOU・遊・もり」に隣接するオニウシ公園では、町民ボランティアの手づくりキャンドルによるライトアップフェスティバル「オニウシ雪ほたる」という関連イベントを実施した。道の駅では、森町の特産品の販売等、訪れた方々への各種サービスを展開した。(写真-21)



写真-21 オニウシ公園



写真-22 矢不來天満宮神社

#### f) 矢不來天満宮神社 (北斗市)

事前にキャンドル製作体験会を開催し、当日は、菅原道真公を祀る由緒ある天満宮の参道に、ほのかな明かりが灯る光景は非常に幻想的だった。(写真-22)

#### 4. 活動の評価(令和5年度手づくり郷土賞受賞、受賞記念発表会でベストプレゼン受賞)

手づくり郷土賞は、地域活動によって地域の魅力や個性を創出し、良質な社会資本と関わりをもつ優れた地域活動を広く募集・発掘し、これらを全国に広く紹介することにより、個性あふれ活力ある郷土づくりに資することを目的として、1986年(昭和61)年度に創設された国土交通大臣表彰制度で、函館花いっぱい道づくりの会「はこだて花かいどう」の取組みが令和5年度(第38回)手づくり郷土賞〈一般部門〉を受賞した。この受賞は、「はこだて花かいどう」の活動として受賞されたが、受賞の選定理由として、「北海道では冬の活動が停滞しがちだが、アイスキャンドルの取組みなど、冬期の活動に力を入れている。」「アイスキャンドルから火の消えないようにするワックスキャンドルに変換する工夫が見られる。」など、花の活動だけでなく、「シーニックdeナイト」の活動も評価されて受賞した。さらに、全国に優れた取組が広がることを目的として開催された手づくり郷土賞受賞記念発表会では、ベストプレゼン賞を受賞した。

これらの受賞により、私たち地域活動団体の取組みが対外的にも評価されたことや全国各地に活動内容を紹介できたことが、今後の継続展開に向けて、大きなモチベーションとなる大変嬉しい出来事であった。(写真-23,24)



写真-23 プレゼンの様子



写真-24 参加者の集合写真

#### 5. 取り組みの効果

「シーニック de ナイト」のこれまでの取り組みを通じて、実行委員会メンバー及び地域活動団体、イベント参加者等に対するヒアリング等から、以下のような効果があげられた。

- ・年々、回を重ねるごとに参加者の拡大や道南地域へのプロジェクト自体の認知度が着実に広がっている。
- ・夏場の植栽活動が行われている場所に設置された手作りのアイスキャンドルには、維持活動で生じた花を使用するなど、沿道美化活動とも連携している。
- ・この取り組みには、数多くの年齢層が積極的に関わり、小学校の児童やPTAも参加するなど、世代を超えて活動の参加を楽しんでいる。
- ・当初参加の無かった自治体や会場等が、それぞれの

自前のイベントとの連携により新規加入するなど、活動の輪が広がっている。

- ・継続的な取り組みが評価され、「ベスト・シーニックバイウエイズ・プロジェクト2019」の最優秀賞、美しい景観づくり賞を受賞した。
- ・シーニックマスクの配布や距離を保った形式でのキャンドル点灯等により、コロナ禍においても活動が継続できることが実証された。

#### 6. 今後の展開方策についての考察

冬の沿道景観活用による地域協働事例として、函館・大沼・噴火湾ルート「シーニックdeナイト」について、取り組みの背景や実施状況、地域への普及・浸透状況等について報告した。冬季沿道景観を活用した地域協働プロジェクトにおける今後の可能性、ルート間連携における課題とその展開方向等について考察する。

##### (1) 参加しやすい仕組みづくり

論文中で報告した冬の沿道景観活用による地域協働活動事例である「シーニックdeナイト」は、回を重ねる毎に道南地域の取り組みとして定着してきた。また、商工会青年部やPTA等の積極的な参画など、地域に密着した構成と運用体制についても徐々に構築されてきたものと考えられる。

一方で、各会場の情報収集や事務局運営は、ボランティア的な活動が前提となるため、当面はそれぞれの主体ができることを継続していくといった視点が重要であり、コロナ禍においても地元の方々や観光客が参加しやすい仕組みづくりについてのさらなる検討が必要である。

##### (2) 広域によるルート間連携に向けて

シーニックバイウエイ北海道では、当該ルートを除く道央・道南ブロックの3ルート(支笏洞爺ニセコルート、札幌シーニックバイウエイ藻岩山麓・定山溪ルート、どうなん・追分シーニックバイウエイルート)において、それぞれのスタイルで冬の沿道を演出する取組みが展開されている。

今後は、道央・道南ブロック共通のポスターやSNS等、広域によるルート間連携の広報・周知についての検討及びさらなる展開が必要である。各種広報手法の今後の充実を図っていくためには、運用体制の強化も必要となることから、最低限度の運用経費を確保するための収益事業等についても今後検討していく必要がある。函館・大沼・噴火湾ルートや支笏洞爺ニセコルートでは、道路協力団体制度を活用して物販展開するなど、徐々にその兆しも見えてきている。

### (3) 地域の防災意識の向上に向けて

函館・大沼・噴火湾ルート連携事業の一つである「はこだて花かいどう」では、社会資本の維持管理や自然環境の保全に関心を持つ住民が本取組へ数多く参加していることを活かし、北海道開発局や函館市のほか、NHKや民間企業とも連携して、2023年6月に地域の将来を担う子供達を対象とした防災体験イベントを実施した。

北海道開発局は除雪トラックや照明車などの作業車を展示。函館市はダンボールを使用したトイレやベッド等の防災グッズや防災パネルを展示した。また、NHKはVRを使用した浸水体験を実施し、ネッツトヨタでは電気自動車を用いた非常時給電システムにおける給電の様子を実演した。今後、シーニックdeナイトでも、子供達が楽しみながら防災意識を高揚させる取り組みを検討し、活動の幅を広げていきたい。(写真-25, 26, 27, 28)



写真-25 作業車の展示



写真-26 参加者の様子



写真-27 防災グッズの展示



写真-28 給電の実演

### (4) キャンドルを通じた日本風景街道「のしろ白神のみち」との交流

2023(令和5)年2月に開催された一般社団法人北海道開発技術センター及びシーニックバイウェイ北海道推進協議会によるスキルアップセミナーへの参加をきっかけに、秋田県能代市を拠点に活動している「のしろ白神のみち(日本風景海道)」の代表と相互の取り組みについて情報交換等の交流を行ってきた。

2023年(令和5)年11月には、交流プロジェクトとして、秋田県能代市で『ワックスキャンドル製作体験会』が開催され、函館・大沼・噴火湾ルート事務局長の折谷久美子がキャンドルづくりの講師として招聘された。体験会では、ワックスキャンドルの製作工程を「のしろ白神のみち」の代表に詳細かつ丁寧に伝え、プロセスを共有しながら他の参加者にも制作指導が行われた。体験会には、「のしろ白神のみち」の関係者のほか、北海道から能代観光に訪れた一般参加者も加わり、約60名が参加した。なお、この体験会で製作されたキャンドルは、2023年(令和5)12月16日に開催された「第24回のしろまち灯り」で使われ、能代の夜を彩った。今後も、地域の垣根を越えた交流に更なる広がりが期待される。



写真-27 製作工程の説明



写真-28 参加者の様子



写真-29 のしろまち灯りの様子



写真-30 のしろまち灯りの様子

### (5) 20周年にむけて

2025年に活動20周年を迎える「シーニックdeナイト」は、地域の景観を共に守り次世代に継承するための取組として、高齢者から子供達が一緒に活動することで世代間交流が図られ、地域の活性化にも繋がっていることから、今後も30年、40年と活動を続けていきたい。

## 7. おわりに

地域の方々や来訪者がキャンドルの灯りで冬の沿道景観を彩り、一緒に楽しむ取り組みとして始まった「シーニックdeナイト」は、シーニックバイウェイ北海道における冬のプロジェクトとして、着実に地域に定着している。また、関係者や国内外の来訪者から今後の継続が望まれていることから、シーニックバイウェイらしい“無理をせず、楽しく”をモットーに冬の沿道景観活用による地域協働がゆるやかな連携を図りながら、徐々に北海道全体に広がっていくことが期待される。